



T O P I C S

1/21(土)~2/7(火)まで、土曜・平日コース(各2回)に分け、子ども図書研究室講座を実施しました。「中学生への読み聞かせ - 学校図書館から見た中学生の読書」と題し、元中学校司書であり、現在は小学校で学校司書をされている原田栄子氏を講師に迎えました。

中学生を対象にした読み聞かせには、多くの方が迷っているようです。講師は「読み聞かせに幅の広さを感じ、多くの文献に当たったが、実践し、失敗し、身に付いていくものだと悟った」と述べられています。学校司書として、小中学生に対する読み聞かせはどのようであればよいのか、「本を楽しむ」読み聞かせを中心に話されました。(内容は裏面に紹介)

子ども図書研究室のテーマ展示

「卒園・卒業と入園・入学の本」(3月上旬まで)

「こどものとも 復刻版を中心に」

子ども図書研究室講座「中学生への読み聞かせ」

講師 原田栄子氏 紹介資料

イベント情報

くどうなおこプラネタリウムおはなし会

「のはらうた星まつり4」

日時: 3月25日(土) 18時~19時30分

(開場 17時45分)

場所: ディスカバリーパーク焼津プラネタリウム

出演: 工藤直子さん(詩人・童話作家)

観覧料: 大人(16歳以上) 1,200円

子ども(4歳以上16歳未満) 400円

定員: 165名

問合せ先: ディスカバリーパーク焼津

TEL 054-625-0800

新着図書から

『じろじろぞろぞろ』



きゅーはくの絵本 南蛮屏風
九州国立博物館/企画・編集
フレーベル館
2005年10月

南蛮船から降りてきた南蛮人たちを日本人がじろじろ。南蛮人たちは教会へぞろぞろ。南蛮船からはたくさんの荷物が降ろされ、店に並べられる。教会ではお祈りが始まるようだ。

南蛮人とは桃山時代のスペイン人やポルトガル人の呼び名。九州国立博物館収蔵の南蛮屏風を、その描かれた物語に沿って紹介する。博物館で学芸員に説明してもらいながら屏風を見学しているような楽しさがある。巻末に解説ページあり。同館収蔵品を楽しむためのシリーズで、『まいごのぴーちゃん』も同時刊行。(鈴木)

『ごきげんぶくろ』



わくわく幼年どうわ 15
赤羽じゅんこ/作
岡本順/絵
あかね書房
2005年7月

友達の家へ遊びに行った主人公かなは、けんかをして友達の家を飛び出してしまうが、道に迷い、不思議なお店を見つける。その店の魔女の様なおばあさんに、「そのふきげん、わたしにうってこないかい」と言われ、「ごきげんぶくろ」の中に言いたい事を吐き出した。ところが、ごきげんぶくろの中では、ふきげんだけでなく、かなの優しい気持ちのかけらがきれいに輝いていたのだった。すっきりしたかなは、探しにきてくれた友達と仲直りをする。こんな袋があったらと思わせる作品。【5歳ぐらいから】(殿岡)

子ども図書研究室講座 「中学生への読み聞かせ」報告

ボランティアや司書が行う読み聞かせは、信頼関係のないところで読むから大変である。たとえば、それぞれの家庭の事情に対する配慮は担任ならば可能だが、ボランティアでは難しい。クラスで読む時は担任に相談したほうがよい。ボランティアとして読む時は、楽しい話が無難。中学生に本への興味を持ってもらう、その手だてとして読み聞かせを行うのである。また、学級単位の場合は聞きたくない生徒もその場にいる。本来、読書は自由なものであり、読まない自由もあるので、強制的に読ませてはいけないと思うが、教育現場、教育的配慮からすると、そうとも言えない。大切なことは読み手の選書のセンスと読む人の態度ではないか。

選書は難しい。聞き手を目の前においた1回限りのライブであり、この本が良書だとは言いきれない。適書として、聞き手の状況にあったもの いろいろな種類、たくさんの中から選ぶ 大勢の時は少しやさしい本を選ぶ 初めての読み聞かせでは、昔話がよい。

教師が学校で読み聞かせを行う場合、学校には色々な子どもがいるから選書が大変だが、担任をしていれば連続して読み聞かせができるからよい。それに適した本として、『朝の連続小説』（杉山亮／著 仮説社）『本を通して世界と出会う』秋田喜代美・庄司一幸／編（北大路書房）を紹介。

中学生は、休み時間、図書室に大勢来るが、貸出数は少ない。部活や塾があるため借りていっても読めない状況なので、図書室で続きを読むことが多く、生き方、職業、事件等内面的な本を選ぶようだ。読書力の差は小学生より大きい。また、多忙で疲れている子、悩んでいる子、ストレスが多い子、クラスで居場所のな

い子がいるという。デリケートな中学生に対して、プライバシーにも配慮しないとイケない。不読者もさることながら、多読者への配慮も必要である。

2日目は、中学生に読み聞かせるために5分ぐらいで読み終える本を持参し、グループに分かれて読み聞かせを行った。絵本あり物語ありだったが、「読んでもらおうとふわーっとした気分になりいいですね」という感想が聞かれた。

読み聞かせを通して、本の面白さを伝えていきたい。読書の楽しさや喜びを知った子どもたちは、人生の壁にぶつかった時に切り抜けることができるだろうし、公共図書館の良き理解者になるであろうと結んだ。

『子ども図書研究室講座』レジュメは県立中央図書館で貸出しています。

所蔵資料から

「アスファルトに生えてきた大根」が話題になった時、読み聞かせをして子どもたちに人気だった本は...



『大根はエライ』
月刊たくさんのふしぎ
2003年9月号
久住昌之／文・絵
福音館書店

いろいろな食べ方があり、色々に使われる言葉があることを知り、やっぱり「大根はエライ」とうなずいてしまう。

中学生に好評だった本として...



『エパミナダス』
愛蔵版おはなしのろうそく1
東京子ども図書館／編
東京子ども図書館
1997年11月

エパミナダスは男の子。彼の心は純粋なのか？ 軽いいたずら心なのか？

(栗山)

*表紙画像はすべて出版社の許可を得て掲載しています。